

「日本写真保存センター」調査活動報告(16)

多彩な人物写真 — 収集・保存した写真原板から —

松本 徳彦 (専務理事)

写真を撮る動機はと聞くと、多くの人が人物、それも身近の人を撮ることから始めたという。ある著名な写真家は好きな女性にラブレターひとつ出せなかったが、“写真を撮らせて”と言って数枚撮り、興奮さめやらぬ内に現像しプリントした。露光した印画紙を現像液に浸し、じわっと浮かび上がってくる彼女のなんと美しかったことかと目を細め、動機とは案外そんなものであるという。

膨大な数の写真が日々撮られ蓄積されている。その内の相当な部分に人物写真がある。古くは著名人が多かったが、今日では万人が被写体となっている。写真保存センターが収集している写真原板のなかにも人物像が無数にある。その収集基準を決めることは大変難しいが、一応保存センターでは、時代を彩ったさまざまな人物写真を集めている。なにも有名人とは限らない。市井の人が写ったものもある。その時代がどんな様相であったかが判る写真を集めていると言っていい。

中島健蔵 写真家でない視点で人物表現を…

フランス文学者のヴァレリーやボードレールの翻訳をはじめ評伝『アンドレ・ジイド』などで知られる仏文学者の中島健蔵(1903～1979年)が、写真を撮っていたことを知る人は余り多くはない。その中島が名だたる著名な文学者や芸術家、交友した文化人を数多く撮っている。写真家も木村伊兵衛、渡辺義雄、土門拳らをパーティーの席などでスナップしている。誰も写真家と意識していないせいか、ごく自然な普段の顔で撮られている。標準レンズを付けたライカをポケットから取り出しパッパと撮り、それが相当な量の人物像となっているから凄い。その残された写真原板が写真保存センターに寄贈されている。

中島は木村、渡辺両会長時代にはJPSの会合に度々参加され、盃を交わした先輩たちも多いはず。なかでも日中文化交流の架け橋としての活動では大変お世話になった。

写真は日大芸術学部の創設に関わった金丸重嶺教授と木村の屈託のない表情描写は人物表現の極みである。1958年6月11日、日本写真協会の「写真の日」祝賀会を終えて、路地に出たところを捉えたものである。



杵島 隆 時代を先読みする才覚が…

戦後いち早く復刊したアルス『カメラ』1950年5月号の月例で、選者の土門拳に激賞され、特選に選ばれた「老婆」でデビューした杵島隆(1920～2011)はアメリカ、カリフォルニアで生まれ、3歳のとき帰国し母方の杵島家の養子となった。「老婆」は自分の祖母をクローズアップしたもので、そのしわくちゃな貌とソラナイズした異様に光る眼は、女の一生を象徴しているかのようだ。1951年創立した広告プロダクションのライト・パブリシティの写真部に入社し、広告写真の先駆けとして活躍する。ニッポンビール、東洋レーヨン、モノゲンなどの広告で頭角を現わし朝日広告賞を受ける。富士フィルムのコンテストでも「女の顔」が最優秀賞を受けるなど、その斬新な表現が高く評価された。そうしたなか、話題をさらったのが「裸」であった。皇居桜田門や銀座四丁目、丸の内ビル街でのヌード撮影は警視庁の取り調べを受けるなど、その意表を突く表現行為が関心を呼んだ。

その後広告写真から手を引いた杵島は「蘭」や「歌舞伎」の豪華写真集を発表するなど時代を先読みする才覚があった。



吉岡専造 個性を巧みなカメラワークで捉える…

戦後のわが国の復興と独立に邁進した、硬骨のワンマン首相と呼ばれた吉田茂を1951年のサンフランシスコ講和条約調印式から晩年までの17年間を撮り続けたのが、朝日新聞社出版写真部長の吉岡専造(1916

～2005年)である。吉田は国会で食い下がる取材カメラマンにコップの水をかけたり、予算委員会で野党議員に「バカヤロー」と罵声を浴びせて総辞職するなど、強烈な個性の持ち主であったが、巧みなジョークやウィットで衆人から愛される人でもあった。葉巻をくわえ周囲を威圧する風貌からは



「写真嫌い」とまで言われていたが、吉岡だけには相好を崩して、たびたび大磯の自宅に招き入れて撮影が行われ、1967年満89歳の折に写真集『吉田茂』を朝日新聞社から上梓した。表紙に「九十歳を迎えた昭和の元勳」と書かれた帯に、吉田はご満悦であったという。

吉岡は長男真司の誕生からの1年を集成した写真集『人間零歳』がある。ほかに『吹上の自然』、『素顔の昭和天皇』などの豪華写真集がある。写真は吉田茂、大磯の自邸で写す。1961年5月30日。

野上 透 ジャーナリスティックな視点で…

日大芸術学部を卒業した根岸秀迪(1935～2002年)は、1958年4月講談社に入社し写真部に配属された。ほどなく文芸雑誌の『群像』で文士の写真を撮ることになる。1959年『週刊現代』が創刊され、グラビア担当になり人物やルポルタージュを撮影するが、会社の規定で本名での氏名表示ができなく、野上透として活動することになる。7年後の1964年退社しフリーランスとなり、講談社の『週刊現代』『日本』『われらの文学』『現代



の文学』などで文士のポートレートを撮る。文士は個性的で近寄りたいたい人が多かったが、生真面目さと上野育ちの屈託のない人柄が好かれ、幾つもの文芸誌や全集での仕事をこなしてきた。人物の特徴や印象を手堅く捉え、文士だけでなく経済人や文化人など幅広い人物像で誌面を飾っていた。

学生時代から野上の写真はどれもみな黒々とプリントされ個性的であった。『週刊現代』の初代編集長大久保房男は、彼の黒々とした調子について、写真のもつ深遠な意味合いだけでなく、社会の風潮や時代の影を読み込んでの印象と見ることもでき、鑑賞者に語りかけているようだと評価していた。この三島由紀夫は1970年7月6日、自宅玄関前で撮影。この年11月25日、市ヶ谷の陸上自衛隊東部方面総監部で盾の会の仲間と自決する。

石松健男 印象を繊細な眼差しで…

大分合同新聞の新年特集号で郷土出身の彫刻家朝倉文夫(1883～1964)を取材するために、石松健男(1936～2008)は1962年12月初旬、台東区谷中にある自宅兼アトリエ(現在は朝倉彫塑館)を訪ねた。初対面の朝倉は和服姿でアトリエに招き入れ、作品を背景に落ち着いた口調で郷土のことや制作過程の彫像について説明をした。その時の印象があまりに強烈で、石松は魅了されたという。この1日だけでは到底撮影しきれないと感じ、日常生活も撮らせて欲しいとお願いしたところ、どうぞと快く許され都合3日間通い詰めた。

アトリエで作品と対峙する朝倉の眼光の鋭さ、粘土をこねる、石膏を削る、その手さばきの力強さを次々と撮影していった。一段落しほっとした瞬間や、椅子に深々と座って気持ちよさそうに煙草を吸う姿に人間味を感じて、180カットもの写真を撮っている。今となっては知る由もない晩年の朝倉の日常が記録されていた。

石松は日大芸術学部を1958年に卒業し、2年間肖像写真家の阿部昭二のもとで人物撮影の手ほどきを受け、大分合同新聞の東京支社で写真取材を担当する。当時前衛と言われた現代美術家集団のネオダダイズム作家たちの街頭パフォーマンスや作品制作の場を撮影する。映画監督吉田喜重の「煉獄エロイカ」のスチール撮影、アキコ・カンダのモダンダンス、花柳幻舟の創作舞踊など時代を先取りするアーティストたちを撮り続けたことで知られている。写真はアトリエで休む朝倉文夫 1962年12月7日。

